杉並区

令和５年７月発行　第30号

在宅医療地域ケア通信

在宅医療と介護の今

今号の内容

●在宅医療地域ケア会議第5期がスタート ――全体会で新年度の運営方針を決める …… 1～2面
●令和4年度 第2回在宅医療地域ケア会議の報告 …… 3～4面
●杉並区ケアマネジャー協議会独自研修開催 ――杉並区における医療介護連携について …… 4面

在宅医療地域ケア会議第5期がスタート ―全体会で新年度の運営方針を決める

平成27年度（2015年度）にスタートした杉並区在宅医療地域ケア会議※（以下、「地域ケア会議」という）は、令和5年度（2023年度）、第5期（1期2年間）を迎え、新たなスタートを切りました。西荻、荻窪、高井戸の3圏域ではリーダー医師が交代したほか、全圏域で主任ケアマネジャーが代わりました。4月20日には杉並区医師会館で新年度の運営方針を決める全体会が開かれ、新しいメンバーでの話し合いが行われました。

7圏域のリーダー医師は以下のとおりです。（新任は田中医師、志知医師、小泉医師の3人）

川瀬医師（井草）

田中医師（西荻）

志知医師（荻窪）

塩田医師（阿佐谷）

小島医師（高円寺）

小泉医師（高井戸）

入谷医師（方南・和泉）

※医療と介護に携わる地域の関係者が、圏域ごとに集まって課題に向き合う会議体

●主任ケアマネジャーは全員新任

各圏域の地域ケア会議の企画・運営は、リーダー医師を始め、主任ケアマネジャー、各ケア24の地域包括ケア推進員が担います。このうち、新たに就任した主任ケアマネジャーの皆さんを紹介します（下記写真）。

主任ケアマネジャーは、介護や在宅療養の課題を抽出し、リーダー医師やケア24の推進員と共に、地域ケア会議において議論するテーマを設定していきます。

猪野さん（井草）

下村さん（西荻）

多島さん（荻窪）

髙井さん（阿佐谷）

野中さん（高円寺）

森田さん（高井戸）

大橋さん（方南・和泉）

●令和4年度は開催回数、参加人数とも増加

全体会では、区が令和4年度（2022年度）の地域ケア会議実施結果を報告しました。全圏域の開催回数は11回で、前年度の7回より増加しました。このうち対面開催（対面とオンラインのハイブリッド開催を含む）は7回、オンライン開催が4回でした。新型コロナウイルス感染症が落ち着いてきたため、参加者数は延べ712人と、前年度の378人を大幅に上回りました。それでもコロナ前の平成30年度（2018年度）と比べると半分以下となっています。参加者を職種別にみると、最多が薬剤師の171人（前年度87人）、次いでケアマネジャー 128人（同83人）、看護師・保健師・リハビリ職79人（同25人）、ケア24職員71人（同54人）で、医師は53人（同38人）、歯科医師は30人（同18人）でした。

●各圏域とも2回開催を計画

7圏域ごとのグループワークでは、今年度の地域ケア会議の運営方針について話し合われ、以下のような内容が発表されました。

「9月、2月の2回開催の予定。薬剤師との連携を取り上げたい。ICT活用について事例研究などでさらに掘り下げたい」（井草）、「対面で2回開催したい。入退院支援をもう一度取り上げたい。独居や老々介護の問題、薬剤師や外来診療との連携なども含め現場の多職種連携につながる会議にしたい」（西荻）、「訪問系の参加者を増やせるテーマで開催したい。2回とも対面開催の予定」（荻窪）、「9月と2月の2回開催（オンライン）を予定。1回目はICTの活用、2回目は連携に関するテーマとする予定」（阿佐谷）、「1回目はICTの活用について、2回目は日常の療養支援を検討中」（高円寺）、「具体的内容はリーダー医師と早めに企画会議で決めたい」（高井戸）、「第1回は9月に対面で開催する。2回目は年明けの予定。ICTの活用と、昨年に引き続き困難事例を取り上げる。地域でのケアマネジャー不足についても検討したい」（方南・和泉）。

今後の詳細なスケジュールは、各圏域の企画運営会議にて決まっていきます。

全体会のグループワークで今年度の方針を議論

●多職種連携の重要性を強調 ―リーダー医師

出席した各圏域のリーダー医師からは、それぞれ思いを込めたあいさつがありました。

川瀬医師（井草）…今期で2期目になる。前期はコロナ禍で参加者が少なく、盛り上がりが足りなかった。今年度はもっと楽しい会にして、医師の参加を増やすことを考えたい。

田中医師（西荻）…杉並区医師会に在宅医療に熱心な先生たちの集い「杉並在宅医会」が立ち上がる。今後コロナで分断された関係を取り戻すためにも杉並区全域でICTによる連携を進めていきたい。

志知医師（荻窪）…元々は神経内科でスタートして、初台や浅草、成城で在宅のリハビリをやっていた。その経験を生かし、パッション、ミッション、ハイテンションの気持ちでやっていきたい。

小島医師（高円寺）…多職種の想いや患者を支える地域のことが分かる地域ケア会議はとても重要だ。これからも頑張っていきたい。

入谷医師（方南・和泉）…在宅医療は20年余やっているが、毎日のように困難事例がある。多職種に頼らなければならないことが多い。その意味でも地域ケア会議の集まりは重要だ。2期目になるがよろしくお願いしたい。

令和4年度 第2回在宅医療地域ケア会議の報告

令和4年度の在宅医療地域ケア会議の2回目が、今年の2月と3月に、方南・和泉、西荻、阿佐谷、荻窪の4圏域で開催されました。「8050 問題」、入退院支援、薬剤師との連携や認知症・独居高齢者の支援をテーマに話し合いました。開催順にご紹介します。

●認知症の母と酒依存の息子 ―方南・和泉圏域

方南・和泉圏域の地域ケア会議は、2月13日にオンラインで開催しました。高齢で認知症の母親と、アルコール依存症の息子の二人が生活保護で暮らす、いわゆる「8050問題」の事例について、グループワークで対応策を話し合いました。グループごとの発表では、二人が同居しつつも母親はデイサービス利用などで一時的に息子と離れて過ごす時間を作る案も出ましたが、「完全に生活を分けるべき」という声が多数ありました。

一方で、入院・在宅に関わらず、息子の依存症治療が重要という意見が多くありましたが、問題はそこに至る過程です。入れ代わり立ち代わり訪問すると、息子がパニックを起こす恐れがあるため、多職種で連携しながら一つずつ慎重にサービスを入れていった方がいいとの指摘がありました。また、訪問は二人以上で行わないと危ないと懸念する声も出ました。息子とどうやって信頼関係を築くかが最初の関門になりそうです。そのほか、後見人制度、金銭管理代行サービスなどの利用を勧めるアドバイスも出ていました。

グループワークの発表の様子

●入退院支援で本音トーク ―西荻圏域

西荻圏域の地域ケア会議は、2月17日に西荻地域区民センターにおいて、「地域ぐるみで考える入退院支援」をテーマに開催し、その現状や課題、将来の在り方について話し合いました。入退院支援は病診連携や多職種連携とも密接に関わるテーマだけに、グループワークでは活発な意見交換が行われました。

2回にわたるグループワークで明らかになったのは、病院から自宅療養への移行をスムーズに行うために欠かせない退院時カンファレンスがコロナ禍で開催されなかったことや、必要な職種が参加できず、十分な情報共有が行われていないことでした。例えば、「救急搬送された患者が退院したら、主治医ではない医師が担当になっていたり、ケアマネジャーに連絡が行ってなかったりするケースがある。患者と信頼関係があるところへ帰してほしい」という声が聞かれました。また、「退院が決まってから在宅療養の対応を考えるのではなく、入院中に準備をしておく必要がある」という意見も出ていました。こうした課題を解決するためにも、適宜バイタルリンク（杉介ネット）などのICTを活用して、情報共有することが必要だとする指摘がありました。

車座で話し合う西荻圏域のグループワーク

●薬剤師との連携深める ―阿佐谷圏域

阿佐谷圏域の地域ケア会議は3月2日、「薬剤師との連携を深めよう」をテーマに、オンラインで開催しました。約50人の参加者のうち、約20人が薬剤師であり、阿佐谷圏域の薬剤師が多職種連携に大きな関心を寄せていることが伺えました。グループワークでは各グループに3人の薬剤師が入り、在宅医療における患者の服薬で困っていること、分からないことなどについて意見を出し合いました。

オンラインでのグループワークの様子

薬剤師以外の職種からは、「複数の薬局から多くの薬をもらっている人に薬局としてどう対応しているか」、「きちんと服薬できていない人に薬剤師は介入できるか」、「どのような時に薬剤師を頼ればよいか」など、さまざまな質問が出ました。これに対して薬剤師側からは、「利用した薬局と薬の種類・量をお薬手帳で把握し、問題があれば主治医に相談して減薬できるようにしている」、「患者がしっかり服薬するよう訪問看護師に頼んだり、家族にも積極的に相談したりしている」、「日常的に患者に接している訪問看護師などが服薬に疑問を感じたら、連絡してもらえれば対応できる」などの回答がありました。また、薬剤師が訪問した時に医師等に提出する報告書を関係者で共有し、服薬が改善された事例も紹介されていました。

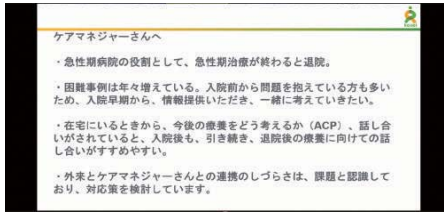
●近隣住民も見守りの輪に ―荻窪圏域

荻窪圏域の地域ケア会議は、3月6日に杉並区医師会館をメイン会場とし、対面とオンラインのハイブリッドで開催しました。「令和4年度版　アンケートから考える医療・介護連携」の第2回として、第1回で行ったアンケートの結果に基づき、認知症・独居高齢者の支援を「情報連携」と「早期発見」の観点から考えました。「情報連携」については、ICTの活用のほか、「薬が飲めていないなど利用者について気付くことがあったら薬局からかかりつけ医へ連絡してほしい」、「ケアマネジャーは月に1回しか本人に会わないので、本人の日常を知る人たちから日頃の様子を聞ける仕組みがあるとよい」などの意見がありました。「早期発見」については、「見守りが必要な独居高齢者の近隣住民、スーパーのレジ係、美容院、民生委員などに、異変に気付いたら知らせるべき窓口を周知しておくとよい」、「認知症サポーター養成研修を一層広めた方がよい」、「若い世代にも地域包括支援センターをもっと広報した方がよい」といった声がありました。また、歯科医師からは、「外来で高齢者を治療しているが、これからは患者のより多くの背景情報を仕入れて、見守る意識を持って診ていきたい」とのコメントがありました。

荻窪圏域は対面とオンラインのハイブリッド開催

杉並区ケアマネジャー協議会独自研修開催 ―杉並区における医療介護連携について

杉並区ケアマネジャー協議会は5月25日に、オンラインで独自研修を開催しました。今回は「杉並区における医療介護連携について」がテーマで、約90名が参加しました。講師陣として、まごころクリニックの山口院長のほかに、河北総合病院、荻窪病院、佼成病院の各連携室の医療ソーシャルワーカーや看護師を迎え、急性期病院入退院時の病診連携や多職種連携を中心に、病院側の取り組みが紹介されました。急性期入院の場合、在院日数は平均10日ほどで、入院と同時に退院支援の検討が始まることや、その際の判断材料として、入院時情報提供書が重要になるという話がありました。併せて、ケアマネジャーに対しては、「すぎなみガイドライン」の一層の活用を呼び掛けるメッセージもありました。また、佼成病院からは、退院前に看護師が患者の自宅を訪問して同居家族に在宅療養開始時の指導をするほか、退院後も病院看護師が自宅を訪問して、訪問看護師と連携しながら看護をする、といった病院・在宅間をつなぐ継続的な支援を開始したとの話がありました。



講義の後は少人数グループに分かれ、意見交換が行われました。ケアマネジャーから病院へ期待することとして、「退院日は早めに教えてほしい」、「丁寧にサービス調整できるように協力してほしい」という意見がありました。また、病院との連携についてケアマネジャーができることとして、「入院時情報提供書を速やかに提出する」、「積極的に情報提供する」ことがあげられていました。

今後も充実した医療・介護連携に向けて、病院・ケアマネジャーともに、より一層の努力が必要という認識を共有しました。

★次号は令和５年11月発行予定です。

〈編集・発行〉 杉並区在宅医療・生活支援センター（電話：5335-7317）